

ケラーの初期の小品「服毒未遂」 „Die mißlungene Vergiftung“ について

—ケラーのリアリズムの原型—

中 野 和 朗

(一)

ドイツブルジョアリアリズム文学の代表的作家、ゴットフリート・ケラーは、とりわけ「ゼルトヴィラの人びと1, 2巻」„Die Leute von Seldwyla“, 「チューリヒ物語」„Züricher Novellen“ 等によってその地位を確固たるものとしている。

ケラーをドイツリアリズム文学の第一人者たらしめているものは、云うまでもなく現実へのそのするどい批判精神とすぐれた芸術的感性の統一性にある。それを形成したものは、無論天性の詩的資質によるところは大きい、その庶民的生いたちと、現世主義的・唯物論的フォイエルバッハ哲学体験、およびその時代に負うところも多大であった。

ケラーは画家としての初志が挫折した後、詩人として再出発する。時代はまさにブルジョア民主主義革命の嵐の時代であり、グリューン、ヘルヴェーク、フライリヒラートといった「時代の呼び声」にケラーの詩的天分は触発され、啓発された。そして1846年に刊行されたケラーの「詩集」は、まぎれもなきケラーの「時代の呼び声」そのものであった。⁽¹⁾

ところで、作家としてのケラーの出発はどのようなものであったのだろうか。

ケラー自身が書き残しているところによれば、その処女作は「旅の日々」Reisetage(1843年)である。しかし、これは未完に終わっている。⁽²⁾

完結した最初の小説は、どうやら1846年に書かれ、1847年„Bündner Kalender auf das Jahr 1847“ に掲載された„Die mißlungene Vergiftung“ ということになるらしい。⁽³⁾ 本稿では、この初期のいわば実質的処女作ともいうべき作品をとりあげ、これがいったい「ゼルトヴィラの人びと」へとどのような結びをもっているかを考察してみたい。

(二)

E・エルマティンガーによると、「1846年の夏、ケラーは Xaver Schnyder とともに Wartensee から Graubünden への旅をした。その時かれは Chur の弁護士で出版社主でもある Wassali (1820-1882) と識り合った。チューリヒへ帰ってから7月6日にケラーは、Wassali にかれの出版している Kalender のために小品を書くとの申し出をした。Wassali はその申し出をよるこんで受けた。この Kalenderbeitrag が „Die mißlungene Vergiftung“ である。」⁽⁴⁾ ということになっている。

また Aufbau 版のケラー全集によると、「この小説は、„Die Schneidergeselle, welcher

den Herrn spielt“と同様 „Bündner Kalender auf das Jahr 1847“ に掲載されたものである。作者がケラーであるということは文体の特徴もさることながら、なかんずくこの寄稿には Kalender の慣習としてはめったにないことなのだが、作品の末尾に K と記入されているという事実がそれを明らかにしている。„Die Schneidergeselle“ には疑念を表しているエルマティンガーもこの小説はケラーが作者であると述べている⁶⁾とされている。

以上の説を採って論究すると、1846年というのは1848年3月前夜の時代、いわゆる「フォアメルツ」の時代である。ケラーの個人史的には1842年ミュンヘンでの3年にわたる画家修業が挫折し、チューリヒに戻り、ようやくかれの詩的天分が開花しはじめたばかりのころである。さらに、ケラーのリアリズムに重大な影響を与えた「フォイエルバッハ体験」は、1848年秋、チューリヒ政府奨学生としてハイデルベルク大学に学んだ時のことであるから、この作品が書かれたのはその2年前ということになる。

にもかかわらずこの作品には、「ゼルトヴィラの人びと」の諸短篇の原形ともいべき諸特徴がはやくも確認できるのである。

われわれの身のまわりには、近代ブルジョア社会が美德と説くモラルを身につけ、せつせとけなげに働らいて懸命に生きている人びとの群れがいる。支配的な道德律の埒内で跳める限り、この人びとは何の変哲もなく、異常とも思われぬ。ところが、真実と理想を追究する現実批判の精神が、ひとたびこの漠とした日常性に光を照射するやいなや、何の変哲もないと思われた人びとのグロテスクな実体が白日のもとにさらけ出される。すると、何の不思議もなかった極くありふれた人々の行動が、まことに異様で異常なものだということを思い知らされることになるのである。

このような魔法にも似た作用をひきおこすのが、まぎれもなく偉大なリアリズム文学の特質なのだ。ケラーのリアリズムの偉大さはまさにこの点にあるといえる。

以下にこの作品のもつケラーのリアリズムの原形を追ってみることにしよう。

(一)

この作品の登場人物は、隣接のカントンのとある薬屋の夫婦と使用人ハンスの三人のみである。

この薬屋の主人は仕事熱心である。「かれは二六時中舐劑や丸薬や軟膏の入ったつぼの間でしか会うことができず、驚嘆すべき能力をもったまめな手はレセプトを書き、エキスを蒸留し、勘定を記帳し、およそかれの店の領域で起ることは全て処理する」といった男である。これは、かれが働らき者で、能力のある人間だということを表わしているように思えるが、実は、かれは「どんな遊び場にもよりつかず、客を招待することもなければ、招待に 응ずることもせず、長い間外食もせず、仕事を済ませたあとの晩酌をくそみそにやっつける」ような男でもある。つまり儉約家なのである。

そしてかれの女房さんとはいうと、「女中はおかず、何でも自分でやってしまう。こすったり、磨いたり、煮たり焼いたり、縫ったり編んだり、すべてはかの女のやるべきことであつた。かの女もまた茶飲み友達をたずねることもせず、芝居見物にもダンスパーティにも行かない」という女性で、似た者夫婦とはまさにこの二人のことであつた。しかもこの二人は、日曜礼拝だけは欠かさないという、つつましく信心深い近代市民の模範的夫婦であつた。

しかし、よく眺めてみると、この勤勉で儉約という近代社会の美德は、ことばを代えたと「けち」で「因業」Geiz und Mißgunst という性格ということになる。

しかもこの夫婦のけちは、「黒パンを買うためにずしりとした金庫からびた一文でも出すくらいなら、むしろパンなどひとかけらも食べず、飢え死にした方がましだ」というような「守銭奴」(schumutziger Geiz) などではない。かれらは二人してたいへんな美食家で、食卓は三度三度ご馳走で飾られ、最良のワインを飲み、上等のたばこをくゆらすのである。つまり自分達だけの伴せや、たのしみごとには決して出しおしみをしない。しかし、「他人に援助を与えるなどということになると、身も心も堅く閉ざし」てしまうというタイプのけちなのである。だから、かれらのもとに奉公人が住みつくはずはなく、女中も使用人も次々と逃げ出してしまっていた。

ところが、この因業夫婦のもとに四年の年季奉公の契約で奉公せざるを得ない一人の少年がいる。この様な場合に登場する人物の名前は決まってハンスであるが、当然われらが主人公もこう呼ばれている。

ところで、このハンスは「痩せてひょろひょろしているのに、いつもがつがつして何か食べられるものがあると、つい手がでてしまう」のである。しかしこれはハンスの病癖などに見做すことは不当である。それはこのような雇用者のもとで働くことを余儀なくされた育ち盛りの少年に発現する必然的な生理現象ないしは健康な肉体の当然の欲求というべきであろう。そしてハンスはすでにこれまで、倉庫に貯蔵されている商品のいくつかを盗み食したことがばれて、主人の茶色のラックを塗った藤のステッキであざができるほど背中をぶんなぐられたり、女主人からはそのとがった爪で顔にみみずばれをつくられたりしたことは数え切れなかったのである。

しかし、ハンスの“食食の罪”の行為は、そのような罰によって抑えられるはずもない。胃の腑の問題。大抑に云えば、生きるか死ぬかに関わる問題を道徳的、精神的極刑によって鎮静化することはたいへん難しいことなのだ。

この小品のわずかな行間からそのことが歴然と表現されている。

ハンスはこのような茶色のラックを塗った藤のステッキや、とがった爪による不当な罰に対してかれの暴君にひそかにささやかなしっぺがえしをする。

それは倉庫に委託販売品として貯蔵されている、世界的に有名なエビナルの薬剤師ジョルジュの作った Pâte pectorale (和胸剤) を盗み舐めることであった。ハンスはこの食事を賠償品 Rekompens-Artikel と呼んでいた。

ところでこの賠償品の箱の上に二本の大きな、密封された広口びんが置いてあった。それは正真正銘の美味な果物のびん漬めにちがいがなかったが、なんとびんのレッテルには「毒、昇汞」と書かれてあり、その下には歯をむき出したどくろが描かれてさえた。ハンスは、そのびんを手にとり眺めては、絶望的にぶつぶつひとりごちてはそれを元の場所にもどしていたのであった。

ところである日曜日のことである。女主人の誕生日だということで、いつもは夫婦二人だけでおこなう礼拝をこの日は多勢の人びとと共におこなうために薬店夫婦は特別にめかし込んで教会へ出かけることになった。ケラーは、幾多の作品の中で登場人物、とくに主人公の服装や外観を詳細綿密に描写することによってその人物の特異性を浮き彫りにするのを得意としているが、この薬屋夫婦の場合に早くもその得意技を披露してみせてくれる。

「ハンスの暴君は、ブルーの鋼鉄のポタンの飾りのついた肉桂色のサテンの上着を着こみ細い南京木綿地のズボンに、白いシルクのスッキングとバックルの飾りのついた靴をはいていた。」手には例の茶色のラック塗りのステッキがひけらかされていた。かれと並んでこの家の守り神 (Hauseule) が、大きなケープ風の襟のついたひわ色のドレスに身を包んで立っていた」と、夫婦が他の人びとと一緒に (gemeinschaftlich) 礼拝へ出かける際のいでたちは描写されている。このような詳細過ぎるほどの外見描写は何を意味しているのか。

ケラーは後にあの傑作「馬子にも衣装」„Kleider machen Leute“ を書いたが、そのモチーフは、人の外観がいかに個々人の運命にまで重大な影響を及ぼすことになるかということである。「見てくれ」が重視されるのは、「商品化」社会の病的な特徴である。ケラーのリアリズムは近代ブルジョア社会のこのようなおぞましい本質をくりかえし暴露しているのであるが、この初期の習作の中に早くもその才能の一端が輝き出していることが認められる。さらに看逃すことのできない次のような描写が続いている。

「(この家の守り神の) くま手 (筆者註: 女主人の爪のこと) は攻撃のために上げられてはいなかった。それは、礼拝の後に慈善箱に入れる通用しない賤の小銭を (それは毎度のことであったが) ひとつかみの小銭の中から選り出すことに忙がしかった。」

この教行の描写はなんともユーモラスである。しかもその根底には、偽善の仮面がはぎとられ、信心深さの本質があばかれた痛快さがある。しかしそのユーモアにかもし出された笑いは、次の瞬間、表情の片隅でストップモーションのように凍りついてしまう。人はこの描写の中に日ごろは特に気にも留めないでいた近代社会の根の深い病気の症例に気づかされるのである。まさにこのような作風こそケラーの特長なのであって、かれの全ての作品に精彩をそえているのである。

さて、この小説はここから後半のクライマックスへと進んでいく。

主人夫婦が礼拝に出かけるに当って、われらがハンスはたいへんな仕事を命じられたのであった。それは女主人の誕生祝いの晩餐の食卓を飾るための小豚の丸焼きを作るということである。いつもガツガツして何か食べられるものがあれば自動的に口の筋肉がムズムズして来て手がひとりりで動いてしまうというハンスが、こともあろうにご主人達のいないところで、ひとりきりで小豚の丸焼き作りである。事の次第がどうなるかは誰にも予感されるが、ケラーはその後の成行きの一部始終を次のように念入りに描いている。

「天上の香のようにかれの臭覚を魔法にかけてしまったこの (子豚の) 素敵な香りは、ついでにかれの口の筋肉を誘惑し、またもやかれの下あごを思わず知らずモグモグと動かせていた。子豚はますますこんがり焼けて、脂がにじみ出てきた。なめらかな表面に無数の小さな脂の泡つぶが、まるで本物の真珠のように歓声をあげながら、寄り集まったり、はじけたり新しく生まれたりしながら、跳びはねたり、踊り廻ったりしていた。プシュプシュ、ジュージュ、と音をたて、焼き串の周りには活気溢れた小世界がごったがえしているようであった。そして哀れなハンスは、いまそこに坐って心棒を廻し、たれをかけ、火をおこしていた。皮はまるで見事にいぶされた海泡石のパイプの頭のように、褐色になり、てかてか光りかりかりに焼きあがってきた。かれはそこに坐っていた。口はつばきでいっぱいになり、目は据って、焼けていく子豚にしっかりと向けられていた。」

このような描写、文体はケラー独特のものであり、「ゼルトヴィラの人びと」で馴染み深いそれと区別することはとてもできない。

このような描写がつづいてハンスは結局、誘惑に負けてこんがり焼けた皮を一口食べてしまう。一口食べてしまえば後は「毒を食らわば皿までも」ということになるのは必然の成行きである。夢見心地のうちにハンスは、「カナンカナンの婚礼」の豪華な宴席でご馳走を次々と平げる幻覚に襲われついに子豚は骨と尻尾だけになってしまう。ハンスは食べ残したところがないかともう一度子豚を眺めた時、ピンと棒のように突っ立っている褐色に焼かれた尻尾が、「主人の例の茶色のラックを塗った命令の化身（藤の杖）」を思い出させた時、雷に撃たれたように現実と呼び戻されたのであった。そしてこの結末がどういうことになるかは、ハンスにも判りすぎるほど判っていた。

「薬屋はまずかれを（茶色のラックの棒で）なぐって半殺しにしてから串に刺して焼くだろう、という幻想からかれは逃がれることができなかつた。いかに悪いとはいえこの拷問はひどすぎはしないか。どうせ死なねばならないのならいまままだ。むしろ自からすっぱりと命を絶つことにしよう。——毒を飲もう！」

そしてハンスは例の「賠償品」の箱の上に置いてあったあのどくろの描かれたラベルの貼ってある二本のびんを降ろし、二本とも空になるまで呑みこんでしまったのである。そして炉の前に横たわり、死がやってくるのを待った。しかし頼みの死は一向にやってくる気配を見せなかつた。やってくるのは礼拝から帰った薬屋であつた。

薬屋は事の次第を知り、しかも大事に蔵しておくために「有毒」のレッテルを貼っておいた上等の果実潰けさえ呑み込まれたとあつてはもはや何の容赦がいろいろ。ハンスは柔らかなビフテキ同然にたたきのめされ、いやというほど足蹴あしこにされて店から叩き出されたのであつた。

以上が、「服毒未遂」の顛末である。

四

すでにたびたび指摘されているように、このほとんど処女作といひうる小品には、後のケラーの代表的諸作に共通する幾つもの特徴がすでに現われている。そしてその独特の語り口は、「ゼルトヴィラの人びと」と同一作家のものであることを疑う余地なく示している。

近代ブルジョア社会の美德、勤勉と儉約と敬虔さを申し分なく身につけてごく当り前の生活を営んでいる薬屋夫婦が、ひとたびブルジョア社会の「放蕩息子」の列に名をつらねるケラーの手にかかると、たちまちその隠された本質をもの見事にあばき出されてしまう。

勤勉と儉約は、もっぱら自分たちだけの欲望充足のための手段なのであり、他人の利得になることや困窮した他人を援けるなどということはかれらの生活信条に反することになる。だからかれらは自分たちの食事にはどんなに贅ぜいを尽くしても、奉公人のためには腹の足しになるものすら与えないということを当然のこととして行なうことができる。年季奉公の契約にしばりつけられ逃げだすこともできない育ち盛りの奉公人は、だからつねにひもじさに責めさいなまれている。その飢えをしのぐためこっそり貯蔵されている商品を盗み舐めたりするが、それにたいする懲罰は「茶色のラック塗りの藤のステッキ」——これは支配するものの力の象徴であるが——による情容赦のない百叩きである。その結果哀れなハンスの身体には青あざが絶えない。

こう見てくると、あの働らき者しむりやで儉約家のしっかり者しつかりやというのは外面おもてづらだけであつて、内面うちづら

は実は憎たらしい我利我利妄者の因業者だということが判ってくる。まさに近代ブルジョア社会の疎外された人間の一つの見事な典型である。実体よりもよく見せるためになされるあの入念な装束はこの疎外態の特質の一つの現われである。

そして、あの「敬虔さ」であるが、すでに哀しいほどの滑稽さで描き出されたが、敬虔さの実践である慈善箱へのあの寄附行為がその本質をあますところなく示している。信心深く、立派な身なりの薬屋夫婦が寄進する小銭は、売上げ金の中に紛れこんだ、賤金や、通用しない小銭ばかりであった。

この作品にも「ゼルトヴィラの人びと」をはじめとするケラーのすべての作品におけると同様、独特の笑いをさそう可笑しさが溢れている。その可笑しさないしは面白さといってもよいが、それはケラーならではのユーモアのなせるわざというほかない。

そもそも健康な笑いというものとは単なるどたばたナンセンスからは生まれてこないものであって、それはつねに真実を看抜く鋭い眼と、現実から一段高い次元に身を置くイロニーから産みだされるものである。ケラー文学の愉しさは、まさにケラーの現実への鋭い批判精神とたゆまざる諷刺と諧謔から創り出されているのである。

以上見てきたとおり、ケラーのもっとも初期の小品「服毒未遂」は、単なる Schwank (笑い話し) にとどめられるものではなく、ケラーのリアリズムの成果である「ゼルトヴィラの人びと」をはじめとする諸作品の原形ともいべき作品と見ることができる。

註

テキストには Gottfried Keller: Sämtliche Werke in acht Bänden. Aufbau-Verlag Berlin, 1958 を用いた。その外次を参考にした。

斎藤 秀編注: 「毒をのんだと思いきや」東洋出版

Emil Ermatinger: Gottfried Kellers Leben. Artemis-Verlag Zürich 1950.

その他、

- (1) 拙稿「若きケラーとその時代」; 「ドイツ文学」40号所収, 1968年参照。
- (2) S. W. Bd. 8. S. 683 及び S. 573 の 1843年7月11日の日記メモ参照。
- (3) E. Ermatinger: G. Kellers Leben. S. 105ff.
- (4) (3)と同じ。
- (5) S. W. Bd. 8. S. 685